

原田種成著「貞観政要上」新釈漢文体系 明治書院 1978年5月20日刊を読む

### 貞観政要の価値と尊崇

1. 『貞観政要』は、唐代文化を基礎づけた太宗の政治の核心を、当時に記録したもので、東洋の文化と政治の得失とを考察する上に、欠くことのできない書である。
2. これは、現今におけるこの書の史料としての価値であるが、かつては、彼我両国において、教養人の必読書とされ、特にわが国における朝野の尊崇が著しかったのは何故であったろうか。
3. それは、東洋の政治理想というものは、『書経』や『大学』をはじめとして、儒教の経典を拠りどころとしているが、それらの経典に記されているものは、あまりにも簡古に過ぎて、具体的に、いかにすべきかということについては記されていない。ところが、『貞観政要』は、単なる政治上の理論を述べたものではなく、いわば、政治の実践記録ともいべきものであるから、太宗が、いかなるときに、いかに思い、いかに行き、臣下はどう言って諫め、太宗はどのように納れたかということが、いちいち具体的に記述されている。それが、後世の偽政者にとって、実際の政治を行う上に良い参考となったからである。
4. 唐朝において、憲宗・文宗がこの書を愛読し、宣宗のごときは、<sup>びようぶ</sup>屏風に書かせて読んだということは、徳川幕府の歴代の将軍が、家康の**ことば**を、東照神君の遺訓として尊崇したことと同様に当然のことである。が、宋の仁宗、遼の興宗の愛読、金の世宗の刊刻、元の世祖の愛読と<sup>げんざん</sup>元槧の刊刻、明の憲宗の刊刻と神宗の愛読、清の高宗の愛読等々、歴代王朝における尊崇の事実も多い。
5. わが国においては、『日本国見在書目録』に既に著録されており、少なくとも<sup>かんむ</sup>桓武帝の世(800ごろ)には渡来していたものと推測され、王朝時代において、<sup>すがわら</sup>菅原家・藤原南家・大江家・清原家などの博士家では、それぞれ家伝の秘本とその秘説とを奉じて、朝廷において進講し、降って、北条氏・足利氏・徳川氏等、政治の要衝に当たったものは、皆この書を尊崇し、その政治の参考にしていただけでなく、知識人の必読の書として愛読され、中世近世の庶民文学にまでも少なからぬ影響を与えていた。
6. 帝王学の宝典として、わが朝廷において進講されていた事実をあげれば、
 

<b>&lt; 天皇 &gt;</b>	<b>&lt; 年代 &gt;</b>	<b>&lt; 進講者 &gt; &lt; 典拠 &gt;</b>
一条天皇	寛弘三(1006)	大江匡衡(江家本奥書)

高倉天皇	安元三(1177)	藤原光範(南家本奥書)
土御門天皇	承元二(1208)	藤原光範(興福寺本奥書)
後鳥羽院	建曆三(1213)	菅原為長(明月記)
後堀河天皇	貞永元(1232)	藤原茂範(興福寺本奥書)
後嵯峨天皇	仁治三(1242)	菅原為長(菅家本奥書)
後光厳院	延文二(1357)	菅原長綱(菅儒侍読年譜)
後円融院	永徳二(1382)	菅原秀長(菅儒侍読年譜)
後小松天皇	応永七~十六(1400 ~ 1409)	菅原秀長(続史愚抄)
後光明天皇	寛永二〇(1643)	菅原長純(続史愚抄)
明治天皇	明治八(1875)	元田永孚(明治神宮宝物殿)
大正天皇	大正三(1914)	三島中州(侍従職日記)
大正天皇	大正四(1915)	小牧昌業(国民新聞)

以上は捜訪し得た史料によって明らかにすることができたものだけであるから、実際には、なお記録に残されていない多くの進講の事実があったものと想像される。

7. ほかに、順徳天皇・花園天皇・後土御門天皇が、この書を愛読された記録がある。
8. そのほか、王朝以来、摂政・関白・幕府・地方豪族及び諸大名、あるいは、僧家・近世の学者や藩学における尊崇については、枚挙にいとまがないが、その中の特筆すべきものについて述べる。
9. <sup>みなちのよりと</sup>源 頼 朝の妻の北条政子は、<sup>すがわらのためなが</sup>菅原為長に命じて、この書を和訳させて愛読し、北条氏は代々、『貞観政要』を重んじている。頼朝自身については、<sup>あづまかがみ</sup>『吾妻鏡』等にその記載はないが、頼朝の遺志を継承した政子が、この本を和訳させていることは、頼朝もまた『貞観政要』を愛読していたものに違いない。
10. 『貞観政要』は、当時教養人の必読書であったから、僧侶もまたこれを愛読して法話の中に引用していることは、道元の『正法眼蔵』および『正法眼蔵随聞記』に見え、日蓮の遺文の中にも、しばしば用いられている。そればかりか、日蓮が自身で筆写した『貞観政要』の一部が現存していることは、単なる宗教家ではなくして、政治に対する関心が深かった日蓮が、『貞観政要』を愛読し、自ら全十巻を書写したことは、さもありませんと思われる。
11. 徳川家康は特に『貞観政要』を愛好し、文禄二年(1593)には、藤原惺窩<sup>せいこ</sup>を召して講義させ、さらに慶長五年(1600)二月には、<sup>あしかが</sup>足利学校の<sup>しょうしゆ</sup>岸主三要に命じて『貞観政要』を開版させている。これが、いわゆる慶長版(伏見版)である。これは、関が原の戦い(この年の九月)の起こる半年も前のことであり、慶長二十年(1615)の大阪夏の陣に先だつこと十五年である。そのときに、この『貞観政要』を開版したという一事によっても、そのころすでに、家康に天下を経営し、治平

の策を講じようとした志があったことを知ることができる。

12. 織田・豊臣の時代は、馬上にて天下を取った時代であったが、徳川家康は、戦乱が治まって平和が来たときには、学術を盛んにすることが政治の良策であるとし、平和の到来が近いことを見通し、書籍の出版に着手し、しかも、その第一に『貞観政要』を取り上げたということは、徳川三百年の太平の基礎を築いた理由の一面をうかがうことができる。

P15 ~ 17

[コメント]

リーダーシップ教育の第一級の書といえば、「論語」と「貞観政要」(上・下)であると信じて疑わない。「貞観政要」は、原田先生のこの2冊の本をテキストにしたい。リーダーたらんとする人は、30歳から60歳までに以上の3冊を読むべし。

- 2011年6月9日林 明夫記 -